



琉球の伝統的集落景観とその構造

著者	高橋 誠一, 松井 幸一
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	45
ページ	41-42
発行年	2012-04
URL	http://hdl.handle.net/10112/7329

琉球の伝統的集落景観とその構造

関西大学文学部教授 高橋 誠 一

アジア文化研究センター PD・東西研非常勤研究員 松井 幸 一

要 旨

古来、琉球は交易・交通の重要な経由地として周辺国と盛んな交流をおこなっていた。周辺国との交流は単に物質的なものに留まらず、石敢當などの伝統的地理観、ヒンプンや抱護林などの風水思想など、さまざまな文化や民俗をも受容することとなった。また、さまざまな文化や民俗を受容しつつ、琉球では他の地域とは異なる独自の集落形成過程がみられる。このような文化・民俗の受容と独自の集落形成過程は琉球独特の集落景観を形成することになった。

本発表は沖縄県今帰仁村の古宇利島を事例として、現在もなお残る伝統的な集落景観を調査し、その集落景観の特徴と集落形成過程を考察するとともに、石敢當とシーサー、魔除け貝の分布から伝統的な文化の変容を現地調査から検証するものである。

調査結果からみえる集落景観の特徴としては、家屋のほとんどが平屋建てで、付属屋を併設する。さらに屋敷囲いの設置によって強風を防ぐ家が多く、平屋建て、付属屋、屋敷抱護林が集落景観を大きく特徴づけているといえる。また、屋敷囲いを設置する家屋は集落中央部と東部に多くあり、その分布には偏在性がみられた。その要因は集落の西部には聖地が立地し、ここでは木々が自生する自然景観を維持し防風林の役目を果たすため、聖地近くでは屋敷囲いを設けなくとも風を防ぐことができるからである。このような事例は集落における聖地の立地場所と家屋形態が互いに強く影響しあうことを示している。また、集落内街路の分析からは集落西部に湾曲する街路が多く、西部の方が古い形態を維持していることが推察された。これを裏付けるように宅地割の考察からも西部において古い形態である「混在型」が多くみられ集落西部の形成が比較的早かったと考えられる。

1980年におこなわれた古宇利島の石敢當調査では12基の石敢當が確認された。今回の調査ではさらに増加し49基の石敢當が確認され、これは6.3軒に1基という極めて高い割合で設置されていることになる。他の集落でも石敢當の設置はみられるが、これほど高い割合での設置はほ

とんどみられず、この高密度の石敢當分布こそが「神の島・古宇利島」あるいは「伝統的地理観・文化の残存」を表していると考えられる。さらにシーサーに関しては78頭、魔除け貝は29軒の家で確認することができた。これらの民俗信仰的要素を持つ家は全体の4割弱にのぼり、調査からは古宇利集落では魔除けのための事物が高密度に張り巡らされていると考えることができた。

しかし、石敢當の増加にみられるような大きな変化は民俗信仰の活性化と安易に結びつくものではない。シーサーを屋根に据えるようになるのは明治期以降の瓦葺建物の増加にともなうものであることから、民俗的要素の設置は新しいブームの一種であるともいえる。このようなブームの要因には琉球としての自己証明・自己同一性、または沖縄らしい観光資源の保持と開発など多面的な背景があると考えられる。